『筑波日本語研究』 第九号 筑波大学 人文社会科学研究科 日本語学研究室 2004

連続動作の局面と意味

宮城　信

キーワード：「はじめる」、「つづける」、「おわる」、局面動詞(構文)、連続動作

要　旨

本稿では、単一動作および連続動作(複数の動作)の開始の局面「はじめる」形、継続の局面「つづける」形、終了の局面「おわる」形の構造と意味に関して動詞のアスペクト的な素性の違いに注目して考察を行った。単一動作の場合の局面解釈の要件には開始限界を突破した時点で動作が一部成立していることが重要である。一方連続動作の場合は、二つの構造があり、一つは単位動作が限界性を含意すること、もう一つは単一動作の局面解釈が許容されることが要件にとって重要である。よって、連続動作の局面解釈には、単一動作の局面解釈とは異なる特立した要件があることになる。

0．はじめに

「はじめる[*1]」形の局面動詞構文は、次のように単一動作の開始の局面を表す場合と複数の動作をひとまとまりに捉えてその開始の局面を表す場合とがある。本稿では、後者の場合のひとまとまりに捉えた複数の動作を「連続動作」とする[*2]。

(1) めぐみが歩きはじめる　　(単一動作)
(2) 生徒が飛び込みはじめる　(連続動作)

これまで(2)のような連続動作の局面解釈は、単一動作として解釈が困難になると「動作が複数であるならば可」のような形で、不自然になる場合の齟齬を解消する

*1 本稿では、表記の煩雑さを避けるために先行研究の直接引用部分を除いて、「始める」や「ハジメル」を「はじめる」に書き改めた。同様にその他の局面動詞についても直接引用部分を除いてすべて平仮名書きとした。

*2 本稿では、「習慣」や「同一主体による動作の繰り返し」とその局面は考察の対象としていないが、本稿の分析は当然これらをも射程に入れたものである。

手段として記述されてきた。本稿では、連続動作の局面解釈にもそれを支える特立した要件があるとし考察を進める。

本稿の構成は、先行研究の知見を概観し連続動作の局面解釈とその構造がどのように位置づけられるのかを確認する(1 節)、アスペクト的側面からの動詞の素性分析を整理する(2 節)、「開始の局面」の構造と意味および要求される動詞の素性について考察する(3 節)、「継続の局面」について考察する(4 節)、「終了の局面」について考察する(5 節)、まとめ(6 節)、である。

1．連続動作の開始の局面を表す「～はじめる」形の統語構造

Shibatani(1973)，柴谷(1978)，久野(1983)などによれば、日本語の局面動詞「はじめる」には、自動詞の場合と他動詞の場合とがあり、例えば、単一動作の「はじめる」構文は、統語的に次の二つの構造を持ち得るとされる。

(3)a. めぐみが走りはじめた(<コントロール構造>の場合)
　b. [$_{IP}$ めぐみ$_i$-が [$_{VP}$ t_i [$_{VP}$ PRO$_i$ 走り] はじめ(他動詞)]た]
(4)a. めぐみが走りはじめた(<繰り上げ構造>の場合)
　b. [$_{IP}$ めぐみ$_i$-が [$_{VP}$ [$_{VP}$ t_i 走り] はじめ(自動詞)]た]

また、上記の諸論文によれば、次のような連続動作の局面動詞構文は、<繰り上げ構造>であることが指摘されており、(5c)のような尊敬語化しか許容しない。(引用例の判定は柴谷(1978)による)

(5)a. [[お客さんが着]始めた]　　(柴谷(1978))
　b.??お客さんがお着き始めになった。　(　〃　)
　c. お客さんがお着きになり始めた。　(　〃　)

加えて、連続動作の局面動詞「はじめる」にも、次のような単一動作の局面と連続動作の局面を表すものとがあると考えられる。また、これらの例は、連続的生起を表す副詞「次々に」の共起によって、動作の複数性が保証されている。

(6)a. 生徒達が 次々に 歌いはじめる
　b. 生徒達$_i$が 次々に [t_i [PRO$_i$ 歌い] はじめる]　　<コントロール構造>
　c. 生徒達$_i$ が 次々に [[t_i 歌い] はじめる]　　<繰り上げ構造>

(6a)の例に(6b)および(6c)のような構造があることは、次のように二つの異なる形式での尊敬語化を許容することからも確認できる。

(7) 先生方が 次々に お歌いはじめになる <コントロール構造>
(8) 先生方が 次々に お歌いになりはじめる <繰り上げ構造>

(7)は、「それぞれはじめる」ことが連続生起するので制御可能な<コントロール構造>を持つと考えられ、一方(8)は、複数の動作主体それぞれが「次々にはじめる」ことを制御できないので<繰り上げ構造>を持つと考えられる。言い換えれば、連続動作の局面動詞構文も「単一動作の局面解釈の連続生起」の場合と、「連続動作の局面解釈」の場合とがあることになる。

2．素性による動詞の分類

本稿では、連続動作を構成する単位となる動作(以下「単位動作」とする)が局面解釈のしやすさを決定していると考え、次のような点から動詞を分類する。

(9) ①自動詞を考察の対象とする[*3]
②動詞の「変化の結果」,「動作の限界」,「変化の進展性の限界」,「動作の過程」などのアスペクトに関わる素性に注目し、局面の解釈との関係を考察する

2.1 動作の限界と変化の結果について

まず、「動作の限界(以下素性を表す場合は[限界]と表記する)」について見てみよう。先行研究では、[限界]が常に「変化の結果(以下素性を表す場合は[結果]と表記する)」を伴うとする分析もあるが、本稿では、[限界]と[結果]を独立した素性として分析を進める[*4]。動作の限界に関しては、従来からよく用いられる「期間 Q デ」と共起可能な場合[＋限界]、「期間 Q 」と共起可能な場合[－限界]と判定し、変化の結果に関しては、テイル形で変化の結果を表せる場合[＋結果]であると判定した。

---

*3 他動詞は、主体の動作の局面と対象の変化の局面とが区別しにくいと考え、自動詞を考察の対象とする。ただし、移動場所や起点の「ヲ格」をとる動詞も考察の対象に含める。
*4 松本(1997),川野(2001)などでは、「限界」を持つが「変化の結果」を伴わない移動動詞(「越える」,「通過する」など)を示し、「限界」と「変化の結果」とは異なる素性であるとする。

2.2 動作の「限界」と変化の進展性の「限界」について

動詞の変化には、「進展的変化」と「非進展的変化」とがある。佐野(1998)によれば、進展的変化を持つ動詞は「だんだん(しだいに)～してくる」と調和しやすい。また、進展的変化には、「進展的変化の限界(以下素性を表す場合は[進展の限界]と表記する)」の有無に違いがある。佐野論文では、変化の進展性の限界を持たない動詞を「いったん成立した結果状態が更に変化する可能性を持つもの(佐野(1998)p.8)」であるとする。[－進展の限界]の動詞は、「完全に」などの完遂を表す成分[*5] と共起することはできない。しかし、連続的な変化のある時点に注目して、「期間Qデ」と共起することは可能であり、次のようにあたかも動作の限界を含意するかのごとく振る舞うことが観察される。また、テイル形で結果の持続を表すこともできる。

(10)*その鍋の水が 完全に 温まる ／ *庭に雪が 完全に 積もる
(11) その鍋の水が 15分で 温まる ／ 庭に雪が 一晩で 積もる
(12) その鍋の水が温まっている ／ 庭に雪が積もっている

このように[－進展の限界]の動詞は、いわゆる動作の限界を含意し(「期間 Qデ」と共起可能)ていながら、変化の進展性の限界を含意しない(「完全に」と共起不可能)ということになるわけである。このような点の調和を取るために、本稿では「限界」の概念を従来より広く捉える。また、その方が局面動詞構文の分析には有効であることを示す。

まず、先行研究の言説を確認する。須田(2000)では、「動作の限界」を次のように規定する。

(13) そこにいたれば、動作の展開の過程がつきはて、それ以上展開することのできないような、動作の臨界点である。 (須田(2000)p.87)

*5 森山(1984)では、「こっぱみじんに」,「完全に」,「もと通りに」,「まっぷたつに」などは「それ以上動きが展開しないような変化の結末的様態をあらわす副詞(結末副詞) (p.79)」とする。しかしながら、これらの副詞が常に結末的な状態を修飾できるわけではなく、「??めぐみが 完全に 柿を食べた／ている」のような例は許容されにくい。これらの副詞に関する詳しい考察は、別稿を用意する予定である。

須田論文では、(12)で示される状態を「相対的な限界*6」とするが、「進展の可能性」がある点を「限界」と考えると(13)の規定と齟齬を生じてしまうことになる。動作の限界を「それ以上展開することのできないような、動作の臨界点である」とするならば、[－進展の限界]の動詞は、「動作の限界」を含意しない動詞として扱うべきであろう。結果的に本稿では、「変化の結果」を表せながら、「動作の限界」を含意しない動詞を認めることになる。これは、結果を表す場合のテイル形が、常にこれ以上進展しない限界を伴う変化点を取り出してはいないことを示している。

2.3 動作の過程について

森山(1983),(1986)は、動詞が「動作の過程(以下素性を表す場合は[過程]と表記する)」を持つ場合「はじめる」形が許容されるとするが、局面動詞構文の分析においては、循環論に陥る可能性があるので、「はじめる」形と動詞の過程がどのように関連しているのかを考えてみたい。本稿では、動作の過程を表せるということは、開始限界を突破した時点において動作が一部成立していると認知できる場合である*7 と考える。この点において、動作が完全に成立している維持の開始の局面とは明確に区別されなければならない。例えば、動作動詞や「溶ける」,「渡る」などの一部の変化動詞は、「はじめる」形で進展の開始の局面を取り出すことができる。これに対して、「帰る」,「(乗り)越える」などの変化動詞は、「30分で帰る」や「3秒で乗り越える」というように、ある種の時間的な幅は想定できるにもかかわらず、「*太郎が帰りはじめる」や「*太郎が垣根を乗り越えはじめる」のように「はじめる」形が許容されない。これらの動詞は、開始限界を突破した段階では動作の成立が認められない、即ち過程を持たない動詞であると考えられる。このことから「はじめる」形が取り出しているのは、動作が(一部)成立したと認知された局面であり、たとえ動作成立までに時間的な幅が想定できる動詞であっても、その局面を言語的に含意していない場合は、「はじめる」形は許容されない表現になる。

---

*6 須田(2000)によれば、「相対的な限界」とは次のように規定される。

> 相対的な量や程度の変化をさししめす動詞は、一定の量や程度の変化が限界となるが、さらに変化が進行すれば、その変化した量や程度が、またあらたな限界となる。このような限界を、相対的な限界とよぶ。 (須田(2000)p.90)

*7 このような動作の過程の特徴づけは、矢澤真人先生(筑波大学)の講義から着想を得た。時間的な幅を持つ変化動詞に関してもこの特徴を持つ動詞と持たない動詞がある。

3．動詞の素性分析と開始の局面解釈

3.1 今西(1995)の分析

連続動作の局面解釈の要件について述べた先行研究に、今西(1995)がある。今西論文によれば、動詞のアスペクト的な素性と「はじめる」が表す開始の局面には、次のような対応関係があるという[*8]。

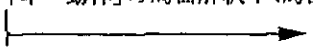
(14)a. 過程性の動作動詞(「走る」など)、過程性の変化動詞(「開く」など)
「はじめる」の意味：１回の動きの開始の局面である
b. 非過程性の動作動詞(「発見する」など)、非過程性の変化動詞(「死ぬ」など)
「はじめる」の意味：連続する複数回の動きが開始の局面にある

次節で、単一動作と連続動作の局面動詞構文の意味と構造を示し、続けて今西論文の動作の過程だけに注目した分析では不十分であることを述べる。

3.2 開始の局面の意味と構造

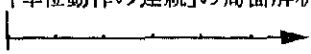
局面解釈と単一／連続動作の対応関係を考察する前に、その構造を明確にしておく。図示すれば、単一動作の場合は(15)の構造に、連続動作の場合は(16)の完成相を時系列的に並べた構造であるか、(17)の開始の局面を点的に捉えて並べた構造である。(16),(17)は、共に連続動作の開始の局面を表しているという点で共通しており単位動作[*9]が完成相か局面かという違いと見ることもできる。

(15)「単一動作」の局面解釈：<局面解釈Ａ>



［単位動作の内部に注目している］

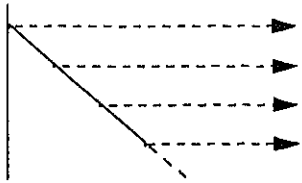
(16)「単位動作の連続」の局面解釈：<局面解釈Ｂ>



［単位動作を点的に捉えその連続に注目している］

*8(14)は、今西論文の主張を宮城が整理した。今西論文では「過程」についての規定が示されていないが、森山(1983),(1986)の「過程」とほぼ同様の概念と見てよいと考えられる。
*9 本稿では、単一／連続動作を構成するの基本となる単位を「単位動作」とする。

(17)「単位動作の局面解釈」の連続：<局面解釈C>



[主に単位動作の開始の局面に注目している]

3.3 動作の過程の有無と開始の局面解釈

(14)で示した今西(1995)の指摘を再検討する。今西論文に従えば、単位動作の[過程]の有無が単一動作の局面解釈か連続動作の局面解釈かを決定することになる。

(18) [歩く]([+過程])

a. めぐみが歩きはじめる　<局面解釈A>

b. 生徒達が 次々に 歩きはじめる　<局面解釈C>

(19) [開く]([+過程])

a. その窓が開きはじめる　<局面解釈A>

b. 町中の窓が 次々に 開きはじめる　<局面解釈B or C>

(20) [並ぶ]([−過程])

a. *めぐみが並びはじめる

b. 生徒達が 次々に 並びはじめる　<局面解釈B>

(18)-(19)のように[+過程]の場合は、<局面解釈A>と<局面解釈C>を許容し、(20)のように[−過程]の場合は、<局面解釈A,C>を許容しない。[+過程]の動詞であっても、(18b),(19b)のように動作主体の複数性など条件が整えば「はじめる」形で連続動作の開始の局面を表すことができる。よって、(14)の規定は強すぎるので、次のように修正される。

(21) [−過程]の場合、「はじめる」形は単一動作の開始の局面を表せない

3.4 動作の限界と変化の結果の有無と開始の局面解釈

つづけて、動作の限界および変化の結果の有無と局面解釈の対応関係について見ていく。2.1-2.2節で述べたように動作の限界と変化の結果とは独立した素性であると考えられる。よって、[+限界]であることが、そのまま[+結果]を意味しない。

(22) [開く]([＋限界],[＋結果])

a. その窓が開きはじめる　　<局面解釈A>

b. 町中の窓が 次々に 開きはじめる　　<局面解釈B or C>

(23) [越える]([＋限界],[－結果])

a.*めぐみがその峠を越えはじめる

b. 生徒達が 次々に その峠を越えはじめる　　<局面解釈B>

(24) [歩く]([－限界],[－結果])

a. めぐみが歩きはじめる　　<局面解釈A>

b. 生徒達が 次々に 歩きはじめる　　<局面解釈C>

(25) [溶ける]([＋結果],[＋進展の限界])

a. その氷柱が溶けはじめる　　<局面解釈A>

b. 会場中の氷柱が 次々に 溶けはじめる　　<局面解釈B or C>

(26) [温まる]([＋結果],[－進展の限界])

a. その鍋の水が温まりはじめる　　<局面解釈A>

b. 広場中の鍋の水が 次々に 温まりはじめる　　<局面解釈C>

[＋限界]で[＋結果]の場合、いずれの解釈も許容する。[＋限界]で[－結果]の場合、<局面解釈B>のみを許容し、[－限界]で[－結果]の場合、<局面解釈B>を許容しない(局面解釈AとCに関しては3.3節も参照されたい、以下の例も同様)。また、[＋結果]で[＋進展の限界]の場合、いずれの解釈も許容するが、[＋結果]で[－進展の限界]の場合、<局面解釈B>を許容しない。このことから、開始の局面解釈AとCに関しては、[限界],[進展の限界],[結果]は要件とは無関係な素性であることが分かる。また、[＋限界]であっても[－進展の限界]である場合の解釈の制限は[－限界]である場合と同様であることが分かる。よって、本稿では、[＋限界]かつ[－進展の限界]の場合も、[－限界]である場合と同様に「動作の限界を持たない動詞」として扱うことにする。

(27) 単位動作が動作の限界を持つ場合、「はじめる」形は<局面解釈B>を表せる

3.5「開始の局面」のまとめ

開始の局面解釈についての考察から、その要件をまとめる。

(28) 局面解釈に関する単位動作の要件

a. 開始の<局面解釈AおよびC>の要件：単位動作が動作の過程を持つこと

b. 開始の<局面解釈B>の要件：単位動作が動作の限界を持つこと

4．連続動作と継続の局面

4.1 継続の局面の意味と構造

同様に「つづける」形の局面動詞構文について考察する。まず、その構造を以下のように示す。

(29) 「単一動作」の局面解釈： <局面解釈A>

- - - ———————————— - - - -　　[単位動作の内部に注目している]

(30) 「単位動作の連続」の局面解釈：<局面解釈B>

- - - - ——·——·——·—— - - - -　　[単位動作を点的に捉えその連続に注目している]

「つづける」形で表される継続の局面の構造の種類は、開始の局面と完全に同じではない。これまでと同様に、副詞「次々に」によって<局面解釈A>以外の解釈に制限する。

(31) 生徒達が 次々に |立ち／飛び込み／並び| つづける。　　<局面解釈B>

(32) 生徒達が 次々に |*歩き／*歌い／*しゃべり| つづける　　<*局面解釈C>

(31)の<局面解釈B>(「"立つ"こと」の連続)は許容されるが、(32)の<局面解釈C>(「"歩く"こと」の連続)は許容されない(3.3節も併せて参照されたい)。既に3.2節で述べたように、<局面解釈C>は、単位動作の局面を取り上げて時系列的に並べることによって得られる解釈である。これに対して「つづける」形は継続の局面の一部を取り出しているに過ぎず、局面全体を取り出し単位動作とすることは出来ない。よって、継続の<局面解釈A>を単位動作とする、<局面解釈C>の構造は理論的に排除

される*10。

4.2 継続の<局面解釈A>と動詞の素性の対応関係

まず、動作の過程の含意と継続の<局面解釈A>の対応関係を見ていく。森山(1983),(1986)に詳しい分析があるように、[＋過程]は、かならずしも継続の<局面解釈A>の要件にはならない。森山(1983)では、[－過程]の動詞で、「つづける」形が許容される動詞を「維持」を持つ動詞(便宜的に本稿では「維持動詞」とする)とし、維持動詞が継続の局面を表す場合、(34)のように有情物による積極的な結果の持続が要求されるとする。

(33) めぐみが歩きつづける ([＋過程]) <局面解釈A>
(34) めぐみが立ちつづける ([－過程]：維持動詞)
(35)*石像が立ちつづける ([－過程]：維持動詞)
(36)*めぐみが倒れつづける ([－過程]：非維持動詞)

維持は、2.3節で示した過程の条件を満たさないので、典型的な維持動詞とされる「立つ」や「座る」は、変化の開始から達成までの進展を言語的に取り出せない(テイル形は、結果の持続を表す)。また、森山(1986)で指摘されるように、継続の局面において[＋過程]の動詞は、動作の進展を表す副詞「どんどん」と共起可能であり、その他の素性の有無はその共起制限に関与しない。ただし、単一動作の開始の局面においては、「どんどん」は、[＋過程]であっても共起できない。

(37) [歩く]([＋過程],[－限界])
a.*めぐみが どんどん 歩きはじめる
b. めぐみが どんどん 歩きつづける
(38) [立つ]([－過程],[＋限界])
a.*めぐみが どんどん 立ちはじめる
b.*めぐみが どんどん 立ちつづける

*10 以下のような例からも、「つづける」形による局面解釈だけが、単位動作の局面の連続(<局面解釈C>)を表せないことがわかる。

(i) 生徒達が賛美歌を 次々に 歌い [はじめ／*つづけ／おわり] だす

(39) [沸く]([－過程],[＋進展の限界])
a.*鍋の水が どんどん 沸きはじめる
b.*鍋の水が どんどん 沸きつづける
(40) [温まる]([＋過程],[－進展の限界])
a.*鍋の水が どんどん 温まりはじめる
b. 鍋の水が どんどん 温まりつづける

4.3 継続の<局面解釈B>と動作の限界および変化の結果の有無

次に、単位動作の動作の限界と変化の結果の含意の有無と<局面解釈B>の対応関係について見ていく。

(41) [開く] ([＋限界],[＋結果])
a. 町中の窓が 次々に 開きつづける <局面解釈B>
(42) [越える] ([＋限界],[－結果])
a. 生徒達が 次々に その峠を越えつづける <局面解釈B>
(43) [歩く] ([－限界],[－結果])
a.*生徒達が 次々に 歩きつづける
(44) [溶ける] ([＋結果],[＋進展の限界])
a. 会場中の氷柱が 次々に 溶けつづける <局面解釈B>
(45) [温まる]([＋結果],[－進展の限界])
a.*広場中の鍋の水が 次々に 温まりつづける

継続の局面においても変化の結果の含意の有無は、局面解釈を制限しない。また、継続の<局面解釈B>の要件は、単位動作が動作の限界を持つことである。

(46) 単位動作が動作の限界を持つ場合、「つづける」形は<局面解釈B>を表せる

4.4 「継続の局面」のまとめ

継続の局面解釈についての考察とその要件をまとめる。

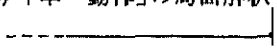
(47)a. 継続の<局面解釈A>の要件：単位動作が動作の過程を持つこと、または、結果の意志的な持続であること
b. 継続の<局面解釈B>の要件：単位動作が動作の限界を持つこと

5．連続動作と終了の局面

5.1 終了の局面の意味と構造

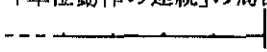
これまでの分析と同様に、「おわる」形で表される終了の局面について、その構造を以下のように示す。

(48)「単一動作」の局面解釈：<局面解釈A>



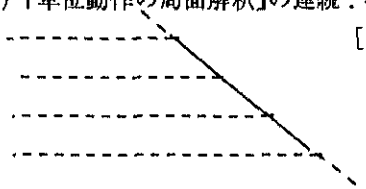
[単位動作の内部に注目している]

(49)「単位動作の連続」の局面解釈：<局面解釈B>



[単位動作を点的に捉えその連続に注目している]

(50)「単位動作の局面解釈」の連続：<局面解釈C>



[単位動作の終了の局面だけに注目している]

終了の局面は、開始の局面と構造の種類は同じであるが、終了の<局面解釈C>は、開始のそれとは違いがあり、(50)で示すように、連続動作の終了(完遂)は含意されない。

5.2 終了の<局面解釈A>を許容する動詞の分析

多くの先行研究では、金水(2000)の指摘(「「咲き終えた花が散っていく」のように、結果状態の維持の終了を捉える場合も一部にはある(p.75)」)などを除いて動作の過程を持たない動詞は、「おわる」形で終了の<局面解釈A>を表しにくいとする。本稿ではこの点に注目して再検討を行う。まず試みに、「おわる」形で単一動作の終了の局面を表せそうな動詞と表しにくそうな動詞のリストを以下にあげる。

(51)「おわる」形を許容しやすい動詞：歩く、歌う、着替える、とける、開く、鳴る、走る、渡る、など

(52)「おわる」形を許容しにくい動詞：動く、落ちる、帰る、進む、倒れる、立つ、出る、寝る、沸く、など

張(1985)では、これらの動詞の「おわる」形について次のような分析をする。

(53) 継続的な動きを表す意志動詞が、「シオワル」と結びついて用いられる時、(中略)動きの量が限定されている動作・作用の終了を表すものと、動作主の意志によって必要な程度まで行われたと思う動作・作用を終えることを表すものとに分けることができると思う。 (張(1985)p.25)

張論文の分析では、(52)の「おわる」形を許容しにくい動詞(「動く(*動きおわる)」,「帰る(*帰りおわる)」)をどのように排除するのかについては示されていない*11。また、呉(1995)や金水(2000)に「おわる」形を許容しにくい動詞についての指摘がある。

(54) 一般に主体変化動詞にはシオワル・シオエルは適用しにくい。
(金水(2000)p.75)

金水論文の指摘は、動詞の一部(「主体変化動詞」)を切り出し、終了の局面を表せない動詞の絞り込みを行っているが、その理由は明確にされていない*12。本稿では、2.3節で述べたように動作の過程に(55a)のような特徴づけをした。それに加えて(51)の動詞は、動作の限界を含意する(予測させる)動詞であると考えられる。

---

*11 張(1985)に、「動作性の弱い動詞」は、「おわる」形を許容しにくいという指摘があるが、「*動きおわる」のような例を排除できない。また、"笑う"は、「おわる」形が許容される動詞としてあげられているが、「動作主の意志によって必要な程度まで行われた」ことは想定しにくい。ただ「動作の限界」が想定しにくい動詞であるため、「おわる」形が許容されにくい動詞であると考えられる。

(ii)??めぐみが笑いおわり、美輝が話しはじめた

ただし、次のように従属節中に表れる場合は、比較的許容されやすい。

(iii) めぐみが笑いおわったあと、美輝が話しはじめた

また、岩崎(1988)では、「おわる」形は、ほとんどが従属節中に現れ、その場合多くが「その前の出来事の終了の局面をあらわしている用法(p.102)」であることが報告されている。

*12 呉(1995)にも同様の指摘があり、これら姿勢変化を表す動詞の場合、文法性が低くなるのは、<+完結性>が含意されないためとしている。

(55) 終了の<局面解釈A>が許容される動詞の特徴

a. 動作が開始限界を突破した時点で部分的に成立していること

b. 動作の限界が予測されやすいこと[*13]

「溶ける」や「開く」などの動詞は、開始限界突破で、動作が部分的に成立する(「少し～した」のような表現が可能である)。これに対して、「帰る」「立つ」などの動詞は、終了限界を突破するまで動作が全く成立しない。(55a)の条件を満たす動詞は、動作動詞と変化動詞の一部である。また、(55b)については、(53)に「動きの量が限定されている場合とそうでない場合とがある」という指摘もあるが、「*寝おわる」や「*動きおわる」が許容されにくいことから、開始の時点で動作が部分的に成立する動作であっても、何らかの終了を予測させない場合、終了の局面を「おわる」形で表現することはできないと考えられる。

5.3 副詞的成分と終了の局面の共起関係

局面解釈BとCは、単位動作のあり方を表す副詞的成分の共起制限に違いがある。連続動作の終了を表す「全員」や「最後の一人まで」は、<局面解釈B>と共起できるが、連続的生起を表す「次々に」や「どんどん」は、<局面解釈B>と共起できない。

(56)a. 生徒達が 全員／最後の一人まで 賛美歌を歌いおわる　<局面解釈B,C>

b. 生徒達が 次々に／どんどん 賛美歌を歌いおわる　<局面解釈C>

(57)a. 生徒達が 全員／最後の一人まで その峠を越えおわる　<局面解釈B>

b.*生徒達が 次々に／どんどん その峠を越えおわる

このように<局面解釈B>を表す表現も「次々に」,「どんどん」などが生起すると許容されなくなる。副詞的成分の共起制限の違いからも連続動作の終了の局面が異なる二つの構造を持つことが支持される。

5.4 連続動作の終了の局面と動詞の素性の対応関係

次に、単位動作の動作の限界と変化の結果の含意の有無と<局面解釈B>の対応関係について見ていく。

---

*13(55b)と同様の指摘は、森山(1983),(1984), 張(1985), 須賀(1990), 呉(1993),(1995)など多くの先行研究に見られる。

(58) 〔開く〕 ([＋限界],[＋結果])

a. その窓が開きおわる <局面解釈A>

b. 町中の窓が開きおわる <局面解釈B>

c. 町中の窓が 次々に 開きおわる <局面解釈C>

(59) [越える]([＋限界],[－結果])

a.*めぐみがその峠を越えおわる

b. 生徒達がその峠を越えおわる <局面解釈B>

c.*生徒達が 次々に その峠を越えおわる

(60) [動く]([－限界],[－結果])

a.*めぐみが動きおわる

b.*生徒達が動きおわる

c.*生徒達が 次々に 動きおわる

(61) [走る] ([－限界],[－結果])

a.?めぐみが走りおわる <局面解釈A>

b.?生徒達が走りおわる <局面解釈B>

c.?生徒達が 次々に 走りおわる <局面解釈C>

(62) [溶ける] ([＋結果],[＋進展の限界])

a. その氷柱が溶けおわる <局面解釈A>

b. 会場中の氷柱が溶けおわる <局面解釈B>

c. 会場中の氷柱が 次々に 溶けおわる <局面解釈C>

(63) [温まる]([＋結果],[－進展の限界])

a.*その鍋の水が温まりおわる

b.*広場中の鍋の水が温まりおわる

c.*広場中の鍋の水が 次々に 温まりおわる

(58-63a,c)のように終了の<局面解釈C>の文法性は<局面解釈A>の文法性と連続的である。また、(58-63b)のように<局面解釈B>は、開始や継続の場合と同様に動作の限界の有無が問題となる。ただし、(61)の「走る」のように、終了の<局面解釈A>を(完全にではなくとも)許容できる場合は、やや制限が緩くなるようである。この場合[－限界]の動詞であっても、「何らかの目標値が達成された」([＋限界]相当)と解釈され、<局面解釈B>を許容しやすくなると考えられる。また、(62)の「溶ける」は、(55a,b)の条件を満たしているので許容され、(63)の「温まる」は、(55b)の条件を満たしていないため許容されない表現になる。

(64)a. <局面解釈A>が表せる場合、<局面解釈C>も表せる

b. 基本的には、単位動作が動作の限界を持たない場合、「おわる」形で<局面解釈B>を表せないが、単位動作が<局面解釈A>を表しやすい場合は、<局面解釈B>を表せる

5.5「終了の局面」のまとめ

終了の局面解釈についての考察とその要件をまとめる。

(65)a. 終了の<局面解釈AおよびC>の要件：

単位動作が開始限界を突破した時点で動作が部分的に成立し、かつ動作の限界を含意もしくは予測させる動詞であること

b. 終了の<局面解釈B>の要件：

単位動作が動作の限界を含意するか、<局面解釈A>を許容する単位動作であること

6．おわりに

本稿の考察をまとめる。局面解釈は大きく分けて、単位動作の局面と連続動作の局面とに二分することができ、次のような要件を持つ。

(66) 単一動作の局面解釈の要件：

a.「開始」および「継続」の局面の場合：

単位動作が動作の過程を持つ（開始限界を突破した時点で、動作が部分的に成立する）動詞であること、ただし継続の局面の場合は、結果の意志的な持続（維持）があれば許容される

b.「終了」の局面の場合：

単位動作が動作の過程を持ち、かつ動作の限界（達成）を予測させる動詞であること

(67) 連続動作の局面解釈（<局面解釈B>）の要件：

① 単位動作が動作の限界を持つこと

② 終了の局面においては、<局面解釈A>を許容しやすい単位動作であれば<局面解釈B>が許容される

(68) 連続動作の局面解釈（<局面解釈C>）の要件：

単位動作が<局面解釈A>を許容すること

局面解釈の要件には、限界の含意とは異なり結果の含意は関与しない。よって、これらは異なる素性として扱うべきである。また、既に述べたように[－進展の限界]の場合は、[－限界]の動詞と同様に動作の限界を持たない動詞として扱うほうが局面動詞構文の分析に関しては有効であると考えられる。

ここで本稿のまとめとして三つの局面解釈のあり方とその体系性について述べる。これまで見たように、局面動詞構文は、まず、単一動作の局面を表す場合(<局面解釈A>)と連続動作の局面を表す場合(<局面解釈B>)の二つに分類することができる。<局面解釈C>は、その両方に関わっており、その位置づけが問題となる。開始の局面においては、<局面解釈C>が表す意味は、連続動作の開始であり、かつ単位動作の開始の局面であった。これに対して、終了の局面においては、単位動作の終了の連続的生起ではあるが、連続動作の終了の局面は含意していない。よって、<局面解釈C>は、開始の局面においては、<局面解釈B>の派生的構造であり、終了の局面においては、<局面解釈A>の連続であると位置づけられる。

最後に1節で整理した統語構造に関する分析との関わりを述べておく。(6b,c)のように、本稿では、複数の動作主体による連続動作の局面に<コントロール構造>と<繰り上げ構造>を認め、単位動作の動作主体が「はじめる」を制御する<局面解釈C>が<コントロール構造>と、単位動作の動作主体が「はじめる」を制御しない<局面解釈B>が<繰り上げ構造>と、それぞれ対応していると考える。これらの違いは、局面解釈の構造の違いからも説明される。本稿では、どのような構造を取り得るのかは、単位動作によって制限される場合があることを示した。これらの事実は、語彙レベルでのアスペクト的な素性分析が、局面表現の分析に不可欠なものであることを示している。また、動作のあり方に関わる副詞的成分の共起制限に関しても構造の違いが反映されていることから、動作の局面の表現は、語彙レベルでの素性分析と局面構造双方からの分析によって精緻化されていかなければならない。

参考文献

荒井文雄(1992)「日本語動詞の意味構造と語彙的アスペクト」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』13 pp.40-105.

張 麗華(1985)「日本語の「シオワル」と中国語の「完」について」『語文』46 pp.22-32, 大阪大学国文学研究室.

呉 鐘烈(1993)「アスペクトと局面動詞」『日本語と日本文学』19 pp.12-20, 筑波大学国語国文学会.

――― (1995)「終了の局面を表す複合動詞について」『日本学報』35　pp.193-207, 韓国日本学会.

姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.

池谷知子(2003)「終了を表す複合動詞後項「～おわる」と「～おえる」について」『日本語・日本文化研究』13　pp.39-50, 大阪外国語大学日本語講座.

今西利之(1995)「動きの過程と様態の副詞」『さわらび』4　pp.34-46, 文法研究会.

岩崎　修(1988)『局面動詞の性格－局面動詞の役割分担－」『武蔵大学人文学会誌』20-1 pp.81-104.

影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房.

――― (1996)『動詞意味論－言語と認知の接点－」くろしお出版.

川野靖子(2001)「ヲ格句を伴う移動動詞について－アスペクト的観点からの動詞句分類における位置づけ－」『日本語と日本文学』33　pp.(左)25-38, 筑波大学国語国文学会.

金水　敏(1995)「いわゆる「進行態」について」築島裕博士古稀記念会(編)『築島裕博士古稀記念国語学論集』pp.169-197, 汲古書院.

――― (2000)「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語文法２　時・否定と取り立て」pp.1-92, 岩波書店.

工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト－現代日本語の時間の表現－」ひつじ書房.

久野　暲(1983)『新日本文法研究』　大修館書店.

松本　曜(1997)「第Ⅱ部 空間移動の言語表現とその拡張」田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』(日英語比較選書⑥) pp.125-236, 研究社出版.

三原健一(2002)「動詞類型とアスペクト限定」『日本語文法』2-1　pp.132-152.

森山卓郎(1983)「動詞のアスペクチュアルな素性について」『待兼山論叢 文学編』17 pp.1-23, 大阪大学文学部.

――― (1984)「アスペクトの意味の決まり方について」『日本語学』3-12　pp.70-84.

――― (1986)「日本語アスペクトの時定項分析」宮地裕(編)『論集 日本語研究(1) 現代編』pp.78-116, 明治書院.

Nakau, Minoru(1973) *Sentential Complementation in Japanese.* Kaitakusha Tokyo.

小田由美(1986)「局面動詞「～はじめる」について」『横浜国大国語研究』4　pp.13-23.

奥田靖雄(1978)「アスペクト研究をめぐって(上)(下)」『教育国語』1-53/54 pp.33-44/14-27.

――― (1994)「動詞の終止形(その３)」『教育国語』2-13　pp.34-40.

佐野由紀子(1998)「程度副詞と主体変化動詞」『日本語科学』3 pp.7-21.

Shibatani, Masayoshi(1973) "Where Morphology and Syntax Clash : A Case in Japanese Aspectual Verbs,"『言語研究』64 pp.65-96.

柴谷方良(1978) 『日本語の分析－生成文法の方法 －』大修館書店.

須田義治(2000)「限界性について－限界動詞と無限界動詞－」『山梨大学教育人間科学部紀要』1-2 pp.87-94.

須賀一好(1990)「<終了>の意味と自他の形態－他動詞形用法に接近した自動詞形用法の分析－」『日本語と日本文学』13 pp.20-27, 筑波大学国語国文学会.

高橋太郎(1969)「すがたともくろみ」金田一春彦(編)1976『日本語動詞のアスペクト』pp.117-153, むぎ書房 所収.

――― (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』(国立国語研究所研究報告82) 秀英出版.

――― (2003)『動詞九章』ひつじ書房.

Tsujimura, Natsuko and Masayo Iida(1999) "Deverbal Nominals and Telicity in Japanese," *Jaurnal of East Asian Linguistics*. vol.8 No.2 pp.107-130.

Verkuyl, Henk J(1993) *A Theory of Aspectuality : the Interaction Between Temporal and Atemporal Structure*. Cambridge University Press Cambridge.

渡辺義夫・陳 軍(1991)「動作性からアスペクト性へ－局面動詞の一考察－」『福島大学教育学部論集 人文科学部門』50 pp.11-26.

[付記]

本稿の内容は、筑波大学大学院・人文社会科学研究科「現代日本語研究」でおこなった口頭発表を基に大幅に加筆・修正したものである。有益なコメントをくださった参加者の方々に感謝申し上げる。

みやぎ しん／人文社会科学研究科

(2004年8月27日 受理)